

吾輩は猫である

夏目漱石



# 目次

はじめに	5
第一部 吾輩は犬ではない	7
一 吾輩は猫である	9
1 大きな池	9
二 人間は我儘なものだ	13
あとがき	17



## はじめに

用紙A5サイズの縦書きの文章が書けます。

細かい調整をしたい場合は、`A5state-two-lineq.sty`をいじってください。

傍線、そして、傍点、傍点……。

ダッシュ(―)を二つ。――。

“ダブルミニニースト(二重引用符)”を「かっこ」と打てば出てくるように単語登録しておけばいいかも。

枠で囲む。枠で囲む。枠で囲む。枠で囲む。枠で囲む。

枠で囲む。枠で囲む。枠で囲む。枠で囲む。枠で囲む。枠で囲む。枠で囲む。

濁点だおあおづい。

波線をつなげる~~~~~!

目次の挿入には「`$\u0332`Latex 原稿」を2回実行する必要があります。



多賀山公園のネコ



# 第一部

吾輩は犬ではない





## 一 吾輩は猫である

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかほとんど見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というのを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番癡悪どうあくな種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかつたから別段恐いとも思わなかつた。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残つている。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉か笹かんだ。その後猫にもだいぶ逢つたがこんな片輪には一度も出会つた事がない。のみならず顔の真中があまりに突起

している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙を吹く。どうも咽せぼくて実に弱つた。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知つた。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つておつたが、しばらくすると非常な速度で運転し始めた。書生が動くの自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思つていと、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たぐさんおつた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまつた。その上今までの所とは違つて無暗に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

### 1 大きな池

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考へて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いた

ら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニヤ、ニヤと試みにやって見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡って日が暮れかかる。腹が非常に減って来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよから食物のある所まであるこうと決心をしてそりりそりりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這って行くとようやくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這入ったら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になっている。さて邸へは忍び込んだもののこれから先どうして善いか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降って来るといふ始末でも一刻の猶予が出来なくなつた。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるとその時はすでに家の内に這入つておつたのだ。ここで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を

見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いやこれは駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せていた。

しかしひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這い上つた。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになつた。この間おさんの三馬を偷んでこの返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといいなから出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出して御台所へ上つて来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を撫りながら吾輩の顔をしばらく眺めておつたが、やがてそんなら内へ置いてやれといつたまま奥へ這入ってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しそくに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入つたがりほ



吾輩は猫である。名前はまだ無い。

とんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思っている。当人も勉強家であるかのごとく見せている。しかし実際はうちのものがいうような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく昼寝をしている事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらしめている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらわしている。その癖に大飯を食う。大飯を食った後でタカジャスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望であった。どこへ行っても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかった。いかに珍重されなかったかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍にいる事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは

必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかったからやむを得るのである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気の良い日は椽側へ寝る事とした。しかし一番心持の好いのは夜に入ってこのうちの小供の寢床へもぐり込んでいっしょにねる事である。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入って一間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中に己れを容るべき余地を見出してどうか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒ますが最後大変な事になる。小供は——ことに小さい方が質がわるい——猫が来た猫が来たといって夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現にせんだってなどは物指で尻ぺたをひどく叩かれた。

## 二 人間は我儘なものだ

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等  
は我儘なものだと断言せざるを得ないようになった。こと  
に吾輩が時々同衾する小供のごときに至っては言語同断  
である。自分の勝手な時は人を逆さにしたたり、頭へ袋をか  
ぶせたり、抛り出したり、へつついの中へ押し込んだりす  
る。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら家  
内総がかりで追ひ廻して迫害を加える。この間もちよつと  
畳で爪を磨いたら細君が非常に怒ってそれから容易に座敷  
へ入れない。台所の板の間で他が顫えていても一向平気な  
ものである。吾輩の尊敬する筋向の白君などは逢う度毎に  
人間ほど不人情なものはないと言っておらるる。白君は先  
日玉のような子猫を四疋産まれたのである。ところがそこ  
の家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持って行って四疋  
ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終  
を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美

しい家族的生活をするには人間と戦ってこれを剿滅せねば  
ならぬといわれた。一々もつともの議論と思う。また隣り  
の三毛君などは人間が所有権という事を解していないと  
いって大に憤慨している。元来我々同族間では目刺の頭で  
も鯉の臍でも一番先に見付けたものがこれを食う権利があ  
るものとなつてゐる。もし相手がこの規約を守らなければ  
腕力に訴えて善いくらいのものだ。しかるに彼等人間は毫  
もこの觀念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼  
等のために掠奪せらるるのである。彼等はその強力を頼ん  
で正当に吾人が食い得べきものを奪つてすましている。白  
君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持つてゐる。吾  
輩は教師の家に住んでゐるだけ、こんな事に関するところ  
よりもむしろ楽天である。ただその日その日がどうにかこ  
うにか送られればよい。いくら人間だつて、そういうつま  
でも栄える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよ  
からう。

我儘で思い出したからちよつと吾輩の家の主人がこの我  
儘で失敗した話をしよう。元来この主人は何といつて人に  
勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。  
俳句をやつてほどとぎすへ投書をしたり、新体詩を明星へ  
出したり、間違いだらけの英文をかいたり、時によると弓



黒猫

に凝ったり、謡を習ったり、またあるときはヴァイオリンなどをブーブー鳴らしたりするが、気の毒な事には、どれもこれも物になっておらん。その癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謡をうたって、近所で後架先生と渾名をつけられているにも関せず一向平気なもので、やはりこれは平の宗盛にて候を繰返している。みんながそら宗盛だと吹き出すくらいである。この主人がどういう考になったものか吾輩の住み込んでから一月ばかり後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわただしく帰って来た。何を買って来たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から当分の間というものは毎日毎日書齋で昼寝もしないで絵ばかりかいている。しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。当人もあまり甘くないと思ったものか、ある日その友人で美学とかをやっている人が来た時に下のような話をしているのを聞いた。





# あとがき

あとがきとか、謝辞を書きましよう。

## 広告鳥



## 吾輩は猫である

---

著者 夏目 漱石

発行日 2024年8月13日

発行者 広告鳥

※無断転載禁止

---